

ガーディアンズ・オブ・ガーデン

人物

白瀬里紅^{べに}（80）ガーデナー

箱崎のどか（26）ハウスキーパー

箱崎亜弥（5）のどかの娘

榎本菊（83）紅の親友

小笠原フジ江（83）紅の親友

杉山松葉（83）紅の親友

桜島珠芽^{たまめ}（17）故人・紅の旧友

○白瀬里家・外観

英国式庭園を設えた洋風の旧家。

○同・リビングキッチン

亜弥、テレビで流れるアニメに夢中。
五色の衣装の魔法少女達が戦う姿。
のどか、手作りスコーンを盆によそい
亜弥を見て微笑むと、庭へ降りる。

○同・庭園

ハサミで草花を剪定中の紅。

東屋でティーセットを囲み談笑中の

菊、フジ江、松葉。

のどかがスコーンを運んで並べる。

のどか「出来ました。渾身の出来です」

菊「わー美味しそうねえ。お腹が鳴るわ」

フジ江「菊ちゃん、程ほどにきなさいな。貴

方もう女学生じゃないんだから」

菊「しょうがないじゃない、私の体がほしが
るんだものエネルギーを。ふふふのふ」

のどか「どんどん召し上がって下さいね。焼きたてが一番美味しいんですから」

松葉、紅の方に振り向く。

松葉「紅ちゃん、のどかさんがスコーン作って下さいましてよ。ねえ、そろそろお休みになりませんこと？」

フジ江「聞かないわよ、紅ちゃんはちっちゃい頃からガーデンキチのまんま」

菊、スコーンを豪快に頬張り。

菊「本当、年を重ねて少しは視野が広がるかと思っただのに、一生ほとんど庭園で過ごしてるじゃない。成長しないのね」

スコーンのカスを豪快にこぼす。

フジ江、呆れて菊のカスを払う。

フジ江「菊ちゃんには言われたくないわね」

松葉「ねーえ、紅ちゃん？」

のどか、思わず笑う。

のどか「私も。皆さんと過ごしていると、自分分が女子高生に戻ったみたいです」

菊「私からしたらね。のどかさんの年ごろな

んで、女学生と何も変わりませんわよ」

フジ江「ひどい話だと思わない？ 5人揃って独り身のまんま、学生時代の仲良しさんが死ぬまで一緒だなんてさ」

テーブルに飾られた古い写真。一葉は制服姿の珠芽。一葉は六十六年前の紅、菊、フジ江、松葉が珠芽と撮った物。

のどか「まだまだ先は長いですよ。皆さんお元気じゃないですか」

菊「そう振舞ってるだけ。この体が動いてるだけで奇跡に思えるもの」

フジ江「向こうで珠芽ちゃんに会えたら、どう話そうかしら。貴方が居た頃とおんなじ生活がずっと続いただけよ、なんて」

菊「ただし、平和にね」

松葉「そうですね。平和に生きて来られた、それだけで十分です。わたくし達には殿方なんて必要なかったのですから」

のどか、珠芽の写真見て。

のどか「素敵なお友達だったのですね、珠芽

さんて」

菊「松葉は珠芽に懸想していたものね」

松葉「なっ。だから違えますっば……」

家電が鳴る。

のどか「あ、出ます」

紅、反応して背筋を伸ばす。

紅「いいのよ。私、出るから」

紅、俊敏に家の中へ向かう。

のどか「……紅さんは、どうして私みたいなものを拾ってくださったんでしょう」

菊「雨に濡れた子犬ちゃんだったの？」

のどか「いえ……子連れで頼る当てもなく、

マツクで泣き崩れていたら、いきなり」

フジ江「そうねえ、それは放っておけないでしょうね。それが紅ちゃんだから」

○同・リビングキッチン

紅、家電に出る。

紅「はいもしもし、白瀬里でございます」

若い男の声。

電話の声「おばあちゃん？　俺、どうしよう
ごめん、詐欺に引っかけちゃった」

紅「あの、一体どちら様……」

電話の声「助けて。この人絶対普通じゃない
よ。大丈夫、後で警察に言えばきつと取り
返せるから。だからお願い」

紅「いえ、私はね」

電話の相手、ドスの効いた男に変わる。

電話の声2「白瀬里さん？　アンタのお孫さ
んね、詐欺に引っかけたとか言い張って
るけど、借金踏み倒してんですわコイツ」
紅、顔を顰め、左腕を見る。

○同・庭園

東屋から紅を見るのどか達。

松葉「どうかしたのかしら」

菊「……振り込め詐欺だったりして」

フジ江「いや、耄碌してそれに引っかかるの
？　私たちみんなの妹分、ちっこかった紅
ちゃんが。哀しいわあ」

○同・リビングキッチン

紅、電話に出ながら左腕を見ている。

電話の声2「今すぐ耳揃えて二千万。振り込まないと、お孫さん口からコンクリート飲む羽目になりますよ？」

紅、受話器を落とし左腕を押さえる。

紅「くっ……どうして」

庭園から、のどかが駆け込んでくる。

のどか「紅さんっ、痛むんですか？」

紅「お願い。みんなの所へ」

のどか「え？」

○同・庭園

紅、のどかに支えられて、東屋のテールまで訪れる。

不審そうに様子を見守る菊たち。

菊「やだ、本当にどうした？ 紅やい」

紅「みんな……これを見て」

紅、震える手で、左腕の裾をめくる。
そこに浮かぶ、薔薇の花模様の痣。

のどか「えっ、タトウー？ どうされたんで
すか、これ」

紅「何十年ぶりかしらね」

菊たち、表情がガラッと変わり真顔。

紅「電話口に出た男が、本当にそれなのかは
わからない。けど、アリウムの肉体を失っ
たあの時の古痕が痛むの」

菊、フジ江、松葉、それぞれに裾を捲
り片腕を出す。それぞれ異なる花模様
の痣が、異なった色で滲んでいる。

のどか「あの、ごめんなさい。私、本当にわ
からなくて。紅さん、一体何の話を……」

紅「のどかさん。あなたは関わらない方がい
い。今日の所は亜弥ちゃんを連れて……」

フジ江「もう、遅いんじゃないかしら」
のどか「え？」

紅たち4人、緊張している。

松葉「そこに、いらっしやいますのね？」

紅たち4人、同じ方角に振り返る。

のどか、その視線を追って振り向く。

美しい庭園を背に、写真の中の姿そのままに珠芽が微笑み立っている。

珠芽「やあ、みんな。六十年ぶり」

菊達、がく然。やがて感慨こみ上げ。

フジ江「珠芽ちゃん……アリウム」

松葉、珠芽に近づき、すがりつく。

珠芽「（抱き止め）松葉、よく頑張ったね」

松葉「寂しかった……寂しかったよお」

珠芽を囲む老婆達。のどか、呆然。

フジ江「ズルいわ、一人だけ若いまま」

菊「（頬摺り寄せ）ああ。お肌つやつつや」

紅「珠芽ちゃん。私、このガーデンはずっと

保ち続けて来たわ。でも今、嫌な予感が」

珠芽「（笑って）紅ちゃんも相変わらず。それ

が六十数年ぶりに最初に伝える話？」

紅「ごめんなさい。でもねでもね、今、電話

越しに確信したの。ミラーズの力が、再び

この国に充満してる」

珠芽「……私の出番は終わり、あっちでみんなを待っただけだって信じたかったけど。私

が呼ばれたって事は、そうなのでしようね」
のどか、震動に振り返り気がつく。
地面が隆起して、多量の蔦が勢いよく
伸びていく。

亜弥、驚いて庭へと出てくる。

のどか「亜弥、家の中へ戻ってっ」

フジ江「のどかさんこそ、そこを離れてっ」

のどか、慌てて東屋から離れる。

多量の蔦が紅、菊たち、珠芽の体を見
る間に覆いつくしていく。

のどか「いやっ、何よこれっ」

のどか、必死に紅の蔦を振りほどこう
とするが、勢いに逆らえない。

収まれば、無事なのは珠芽の顔だけ。

のどか「(愕然) 皆さん……そんな」

珠芽、体を覆われたまま冷静に。

珠芽「私たちは、人間の邪心に巢食う悪魔世
界ミラーズの勢力を封じる為、七十年前、
この国で人の肉体を得たの」

のどか「……え？」

五人の身体を覆う蔦が解ける。と、色
違いのローブを纏っている。五色の魔
法使い風が揃う。珠芽の点呼に合わせ、
一人ずつ決めポーズ。

珠芽「ピクシー・オールドローズ（紅）。ピク
シー・ガーベラ（菊）。ピクシー・ルピナス
（フジ江）。ピクシー・コニファー（松葉）」

最後に珠芽がポーズ。

珠芽「そして私、ピクシー・アリウム」
のどか、一瞬、幻視する。

少女時代に戻った五人の決めポーズ。

すぐ幻視は消え、元の老婆たちの姿。

のどか「皆さんは……何者なんですか？」

珠芽「私達はピクシー。魔法の庭の力を借り
てミラーズの魔を退治する、ガーディアン
ズ・オブ・ガーデン」

亜弥「わあー」

五人、庭に飛び出る亜弥に振り向く。

亜弥「魔法少女だっ」

亜弥、その目を輝かせている。